

〈論文〉

## 戦争記念とツーリズムの遭遇 —戦争記憶の風化をふせぐための課題と可能性—

中 村 香代子

### 序 論

二度の世界大戦を経験し、多くの死者や犠牲者を出しつつも、核保有国は拡大し、戦争はこの地球からなくなることはなかった。いかに戦争が残酷で悲惨なものであるか、傷ついた遺体や廃墟となった街は教えてくれるが、それらが朽ちてなくなつたあと、新しい街をつくり、新しい命をつなぎ、戦争は忘却のかなたに消えてしまう。しかしながら、戦争の記憶の風化に逆らうように、ある者は慰靈塔をつくり、また、ある者は記念碑をつくり、また、ある者はミュージアムを作った。それは、亡くなったものためであるかもしれないし、亡くなったものの家族のためであるかもしれない。また、あるいは、亡くなったものの国家のためであるかもしれないし、全人類の啓蒙のためであるかもしれない。こうして今では、世界中に多種多様の戦争記念を見て回ることができる。

戦争を記念するという作業は、クリエイティブであるが故に、すべてが反戦思想や平和希求を目標とするものではない。戦争記念の施設や軍事博物館では、戦闘機に目を輝かしてはしゃぐ子どもたちの姿を見ることも珍しくないし、あるいは、戦死者を国家の英雄として顕彰することはよくあることだ。他方、加害をもたらした人々への憎しみで渦巻く展示もある。昨今では、写真や映像資料の保存や展示といったものだけでなく、新しい技術も導入されている。VRを使用して、アウシュヴィッツ

ツの生存者の証言をよりリアルに記録したり、あるいは、原爆投下後の広島を追体験できるような試みがなされたりもする。

本稿では、戦争という出来事から長い月日が経ち、近い将来生存者が消滅するであろう現実を前にして、戦争記念の一つの方法としてのツーリズムとの共存の可能性を考えてみたい。まず、第一に、広島という地の観光客の増加傾向から、戦争記念の場と観光客の遭遇について論じる。第二に、世界遺産において負の遺産がどのように認知されてきたか、そして、戦争記念とツーリズムが共存する「ダークツーリズム」の方法論について考察する。第三に、日本の戦争記念がツーリズムと共存するにあたっての可能性と課題を述べる。最終的に、戦争記念の将来的なあり方の一助になることを目的とする。

## 1. 戦争記念とツーリスト

### 1-1. 戦争記念は誰のためか

「安らかに眠ってください 過ちは繰り返しませぬから」

広島の平和記念公園の中心に原爆死没者慰霊碑がある。戦後、その碑を前にして、歴代総理が参列し、広島平和記念式典が催されてきたことは、日本に住むものにとって馴染み深いものだ。なぜなら、それらは、原爆投下時刻に合わせ、毎年NHKで生中継され、夏休みの子どもたちにとっても夏の一つの思い出となって刻まれているからである。その碑に書かれた文に対して、改めるべきだという批判がかつてあった。この「過ち」とはいったい誰の過ちで、ともすれば被害者である人たちの「過ち」であると誤認されるのではないか、という意見である。これに対して、広島市は「原爆の犠牲者は、単に一国・一民族の犠牲者ではなく、人類全体の平和のいしづえとなって祀られており、その原爆の犠牲者に対して反核の平和を誓うのは、全世界の人々でなくてはならない」というのが趣旨で、「碑文の中の『過ち』とは一個人や一国の行為を指すものではなく、人類全体が犯した戦争や核兵器使用などを指」しているのだ、とする。ここでいう「過ち」を犯した主体は、戦争や核兵器使用を

促した人類全体であり、眠る客体はその被害者という構図になる。批判はありながらも、こうした戦争に反対する普遍的言説を作り出した戦争記念は、当時珍しかった。

戦争が加害者と被害者を作りだすものである以上、それを記念する場合、加害者と被害者をどう扱うのかという問いと向き合わなければならない。あるいは、それは、誰が記念するのかという問題とも密接にかかわってくる。戦勝を記念するのであれば、戦争を勝利に導いた戦士たちは英雄視されるが、その裏で被害にあったひとたちは無視される。また、戦争被害を記念するのであれば、痛みや苦しみを受けた人々の記憶をとどめて置く一方で、そのように追いやった加害者への敵愾心で溢れているかもしれない。さらに、記念する主体が国家であるのか、自治体であるのか、市民団体であるのかという別によっても、存在意義が異なる。多くの国家でなされている戦争記念は、ナショナリズムを鼓舞する装置となり、国家の歴史史観の表象でもある。普段目に見えない国家の連続性を可視化する役割を担っている。このことから、国家による戦争記念が歴史認識の国際的軋轢の導火線となることもある。

戦争記念を創造した主体や意図だけが重要というわけではない。それらがどう受け止められるのかというのも大きな問題である。そこは、式典や儀式を通して、大きな舞台となる。その効果を充分に理解している政治家たちは、あるときは有権者へのアピールとして、あるときは、対外的な歴史認識の表現として利用する。こうしたパフォーマンスは、メディアを通して、世界に発信され、記録され、無数の人々の心に戦争記念の表象として刻まれる。

2016年5月27日、当時のアメリカ大統領、バラク・オバマは、広島平和記念公園に訪問し、17分ものスピーチを行った。原爆投下をした加害国の代表が、被害の記念の地に訪れるという象徴的なパフォーマンスは、世界に同時中継された。「空から死が降ってきて、世界は変わった」という文言ではじまるスピーチは、巧みに原爆投下の加害性やそれに対しての謝罪の発言を避け、核兵器のない世界を求める、普遍的な非核化への言葉に終始した<sup>(1)</sup>。しかしながら、オバマ大統領と参列していた被爆

者との抱擁をカメラが映し出したとき、多くの視聴者はそれを好意的に受け止めた<sup>(2)</sup>。70年以上の歳月やもともとの広島の戦争記念の体質、すなわち、「過ち」の主体は人類全体であるという意図がかつての敵国同士のわだかまりを拭い去るのに一役かったことは確かであろう。また、戦後つくりあげてきた、日米関係の歴史があったからこそ実現したものともいえるだろう。戦争記念は、加害や被害という問題に加えて、ナショナリズムとの親和性から、政治的パフォーマンスの舞台として使われることも多いが、逆に戦争のない平和な未来にむけての表象ともなりうることをオバマ訪問が証明した。戦争記念は、誰が何のために作り、そして、それはどのような目的に使われ、どのように伝わり、どのように受け取られるかということまでを考えるべき大変デリケートな領域にある。このような戦争記念を観光の一つの資源として捉えることはできるのだろうか。

## 1－2. 観光と広島

観光とは、「人が日常生活圏を離れ、再び戻る予定で、レクリエーションを求めて移動すること」<sup>(3)</sup>とする定義が広く認知されてきた。しかし、この「レクリエーション」が何を指すのかということについては、議論の余地があった。「レクリエーション」が仕事や勉強の疲れを保養・娯楽によって回復することを指すのならば、「遊ぶ」ことだけが観光の目的として考えられかねない。そのため、観光には、「見る」「学ぶ」行為も目的の一つとして考えられてきた。この領域において、戦争記念は、観光の目的となり得る。観光は、観光する人々を惹き付ける「観光資源」

<sup>(1)</sup> 謝罪発言の有無については、事前に日本側が謝罪発言がなくてもいいということを伝えていた。

<sup>(2)</sup> オバマ訪問前に、NHKが広島県内の被爆者321人にアンケートを郵送し、72%の231人から回答を得た結果によると、9割を超える人がオバマの広島訪問について、「評価できる」(77%)、「どちらかといえば、評価できる」(16%)と回答しており、「どちらかといえば、評価できない」は6人で3%、「評価できない」は2人で1%であった。評価の理由は、「被爆の実態を見ることに意義がある」、「アメリカ国内で反対の世論があるなかで訪問を決断したから」という意見が見られた。NHK News WEB「被爆者の9割超がオバマ大統領の広島訪問を評価」2016年5月25日参照。

<sup>(3)</sup> 井上万寿蔵 1940『観光読本：観光事業の理論と問題』無何有書房

とその資源を享受できるようなレストランや宿泊施設、レジャーやスポーツ施設などの「観光施設」から構成される。その「観光資源」は、主に自然観光資源と人文観光資源の二つに分けて考えられる<sup>(4)</sup>。現代の戦争記念は、おおよそ、「レクリエーション」とは言いがたいが、現代史の悲劇を見て学ぶ人文観光資源の一つであり、戦争被害を展示する博物館などは、一つの観光施設と呼びうるものである。

日本の高校生の修学旅行先として、広島、長崎、沖縄などが選ばれ、その中で、戦争記念施設に足を運ぶ学校は少なくない。広島の平和記念資料館、長崎の平和記念像、沖縄のひめゆりの塔は定番である。修学旅行は、学校の教育の一環としてなされるため、戦争を学ぶ機会として実施されているのであろう。こうした教育の中で、自国の戦争記念を訪問する活動は、日本だけに限られない。海外でも多くの戦争博物館や戦争記念施設において、教師が課外活動として生徒を引率して見学する姿がよく見られる。戦争記念は、娯楽やレジャーではないが、すでに長い間観光の資源として存在してきた。

超高齢化社会の深刻化と一向に打開されない出生率の低下は、日本の未来に暗雲をもたらしている。人口激減が予想される日本のGDPの成長は非常に難しいと予想されるからだ。しかし、デービッド・アトキンソンは、「短期移民」が日本を救うと主張している<sup>(5)</sup>。すなわち、移民政策がなかなか受け入れられない日本では、外国人観光客を誘致して、「観光立国」になることが日本経済に大きなプラスになると訴えている。

こうした考え方は、2000年以降日本の国策にもすでに浸透してきた。2003年「観光立国懇談会」が開かれ、当事の小泉首相は「Yokoso JAPAN！」というCMで日本の観光的魅力をアピールした。2006年には、観光が日本の政策の大きな柱であるとした観光立国推進基本法が成立すると、「観光立国」を推進するために、2008年観光庁が設置された。設立目的には、国民経済の発展、国民生活の安定向上、国際相互理解の促

<sup>(4)</sup> 岡本伸之 2001『観光学入門』有斐閣アルマ

<sup>(5)</sup> デービッド・アトキンソン 2015『新・観光立国論』東洋経済新報社

進を掲げていた。現在では、当初の計画より多く見積もられ、2020年までに4000万人、2030年には6000万人の外国人観光客を見込むよう目標がすえられている。訪日外国人観光客がインバウンド消費を促進し、日本経済の成長戦略の引き金であるとされている。

2017年の統計では、日本に訪れる観光客の7割以上を中国、韓国、台湾、香港の東アジア地域からの人々が占めている<sup>(6)</sup>。次いで、東南アジアからの訪日観光客が10%ほどいる。アメリカ、ヨーロッパ、オーストラリアからの観光客は、合わせて10%を超えるくらいであり、距離に比例した構成になっている。日本で戦争記念と観光を合わせて考えるとき、訪日外国人観光客において戦争当事国が占める割合が多いことが大きな懸念材料となることは容易に想像できる。

広島市は、2017年観光客数が1341万人を数え、7年連続で過去最高を更新、また、外国人観光客に限っても、151万人となり、3年連続で100万人をこえ、6年連続で過去最高を記録した<sup>(7)</sup>。外国人観光客は、一般観光客1157万人の13%とまだまだ占める割合は少ないが、世界最大の旅行口コミサイト「トリップアドバイザー」でも、外国人観光客の満足度の高い観光地の上位に「広島平和記念資料館」が選ばれている。広島市への外国人観光客の国別内訳を見ると、アメリカ・カナダからが27万5千人、オーストラリアからが13万6千人、ヨーロッパからが35万8万人であるのに対し、中国12万7千人、香港8万8千人、台湾10万人、韓国5万5千人となっている。日本全体での観光客国別割合で、7割に上ったアジア地域からの観光客は、東南アジアを含めた合計で32%にすぎず、欧米豪からの観光客が半数を超えるという特徴がある<sup>(8)</sup>。近隣諸国からの観光客の宿泊数が欧米豪からの観光客と比べ少ないことが<sup>(9)</sup>、東京・

<sup>(6)</sup> 日本政府観光局（JNTO）訪日外客数（2017年12月および年間推計値）参照。

<sup>(7)</sup> 経済観光局観光政策部観光企画担当「平成29年（2017年）広島市観光客数について」2017年6月18日

<sup>(8)</sup> 広島県観光課「平成29（2017）年 広島県観光客数の動向」「第七表 平成29年国籍別・知己別外国人観光客数」

<sup>(9)</sup> デビッド・アトキンソンは、欧米豪からの観光客こそ、宿泊数も消費額も多い上客であり、ボテンシャルティを考えると、こちらへの観光誘致を働きかけるべきであるとする。

京都・大阪から一歩踏み入れて旅行する人を少なくさせている一因であることも予測できるが、日本との歴史的背景において軌轍があるからとも推測しうる。日本の負の遺産を観光の資源として考えるとき、こうした歴史認識における国際関係はどうしても乗り越えなければならない壁として立ちはだかる。

## 2. 負の遺産とダークツーリズム

### 2-1. 負の世界遺産

世界遺産とは、world heritageを訳したもので、heritageにはそもそも正と負の区別はない。しかし、日本では一般に、悲劇や惨状の歴史的痕跡を「負の遺産」と呼んで馴染んでいる。この「負の遺産」は、どのように世界遺産の一つとして、位置づけられてきたのか。

世界遺産は、1972年にユネスコ総会で採択された世界遺産条約に基づく、世界遺産リストに登録されたものを指す。世界遺産の創設は、1960年代、エジプト、ナイル川におけるアスワン・ハイ・ダムの建設計画がアブ・シンベル神殿を水没させるおそれがあり、それに対してユネスコが救済のキャンペーンを行ったことが発端になっている。他方、アメリカ国内でも世界遺産トラストを提唱し、世界遺産の世界的枠組みをつくるべきという声があがっており、こうした二つの流れが一つになり、人類史において貴重な財産を保護し、継承していくこうとする世界遺産条約に結びついたのである。日本は、1992年、条約採択から20年を経て、これに批准した。

世界遺産として登録されるには、条約を締結していることが大前提である。その上で、関係機関（日本の場合は外務省）がユネスコ本部にある世界遺産センターに世界遺産リストへの登録を希望する物件を推薦しなければならない。世界遺産には、自然遺産、文化遺産共通して、「顕著な普遍的価値」(Outstanding Universal Value) が求められる。これは「国家間の境界を超越し、人類全体にとって現代及び将来世代に共通した重要性をもつような、傑出した文化的な意義及び／又は自然的な価

値」を意味しており、推薦された自然遺産に対しては、専門機関である国際自然保護連合（IUCN）が、文化遺産については、国際記念物遺跡会議（ICOMOS）が評価報告書を作成する。ICOMOSは、必要があれば文化財保存修復研究国際センター（ICCROM）に助言を求める 것도できる。このようにして作成された調査報告をもとに、総会で選出された21カ国の世界遺産委員会の3分の2以上の多数決で採択されたものが晴れて世界遺産となる。しかし、現状、世界遺産委員会は、多数決を嫌い、全会一致を目指す傾向がある。

世界遺産条約が採択されたはやい時期から、歴史的悲劇の痕跡は、世界遺産として登録が認められてきた。第二回の登録で、奴隸貿易拠点のセネガルのゴレ島（1978年）、翌年に、ポーランドのアウシュヴィッツ＝ビルケナウ ナチス・ドイツの強制絶滅収容所（1979年）が登録されている。その他にも、奴隸貿易拠点や奴隸貿易制度にまつわる場所として、タンザニアのザンジバル島のストーン・タウン（2000年）、ガンビアのクンタ・キンテ島と関連遺跡群（2003年）、モーリシャスのアープラヴァシ・ガード（2006年）、ネルソン・マンデラが収監されていた南アフリカのロベン島（1999年）、水爆実験や原爆実験が行われたマーシャル諸島のビキニ環礁核実験場（2010年）など、今では多くの「負の遺産」が世界遺産として登録されている。世界遺産条約には、「世界遺産条約履行のための作業指針」といって、世界遺産になるために、その中のいずれか一つに該当しなければならないという評価基準はあるが、「負の遺産」を明確に分けて、規定する分類はない。しかし、それらの負の世界遺産の多くが、先の「作業指針」の（vi）「顕著な普遍的価値を有する出来事（行事）、生きた伝統、思想、信仰、芸術的作品、あるいは文学的作品と直接又は実質的関連がある」という規定に基づいて評価されている点が負の世界遺産の特徴の一つといえるであろう。

日本で「負の遺産」として登録されているのは、広島の原爆ドームである。今、原爆ドームといわれている建築は、1915年、チェコ人建築家ヤン・レツツェルの設計によって建てられた広島県産業奨励館であった。1930年代までは商品の陳列や美術館の開催などもしていたが、戦中時に

は奨励館業務を停止し、行政機関の事務所として使用されていた。この建物が世界遺産として評価されるのは、まさに、原爆投下で全壊を免れ、ドーム状の鉄骨が原爆の惨禍を表象する建物だからである。この建物を完全な形に修繕・保存することが、もちろん、世界遺産登録の目的ではなく、原爆によって半壊された建物を、辛い思いを引き起こすからと撤去するのではなく、それを後に残された人々が半壊した姿を永久保存すると決めたものを登録するのである。

先に、戦争記念は、必然的に加害者と被害者という関係を想起させ、非常にデリケートなものだと書いた。広島の原爆ドームも例外ではなく、世界遺産として登録される際に、国際問題を引き起こした。原爆投下当事国であるアメリカと日本による戦争被害を受けた中国が、原爆ドームの世界遺産登録採決に否決はしなかったものの、棄権した。アメリカは、戦争時の行為についてはどのように扱うべきかについて集中的な議論が必要であり、世界遺産条約はこのような戦時の行為について深く議論する用意ができていないということから、この時点でこの案件は議論すべきではないと批判した。また、中国は原爆ドームを世界遺産として登録すると、戦争被害者としての日本という側面ばかりが強調され、戦争加害者としての側面が軽視されかねないとし反対を表明した。日本の負の遺産、原爆ドームの世界遺産登録のプロセスには、歴史認識を介した国際関係が反映されることになった。

山口・福岡・佐賀・長崎・熊本・鹿児島・岩手・静岡の8県にわたる『明治日本の産業革命遺産』が2015年登録される際にも、歴史認識を争点とした政治問題が発生した。韓国は、「第二次世界大戦中、今回の構成資産のいくつかにおいて、韓国人は強制労働により非人道的な扱いを受けた」と主張し、所謂「徴用工」の問題を取り上げ、世界遺産にふさわしくないと訴えた。また、これを受けた中国外交部も中国人が働かされた施設があるとして登録反対を表明した<sup>(10)</sup>。最終的には、2014年6月

---

<sup>(10)</sup> 「日韓、世界遺産で溝埋まらず 第2回会合」日本経済新聞 電子版 2015年6月9日。  
「中韓、ユネスコで対日圧力…歴史問題で揺さぶり」読売新聞 2015年6月10日

に行われた日韓の外相会談で、韓国側が主張する徴用工の歴史的事実を明らかにすることで、韓国が合意をし、政治的決着を見た<sup>(11)</sup>。「負の遺産」は、世界的には、1970年代から認知され、世界遺産登録がされてきたものの、近代以降の戦争や植民地支配に対してのわだかまりはまだ強く、ことに、日本の二つの負の世界遺産登録に際しては歴史認識を発端とした国際的問題が生じた。

「世界遺産はユネスコの大ヒット作品」<sup>(12)</sup>であり、いまや世界遺産は観光資源の一大ブランドであるといつてもよい。世界遺産として登録されたものは、たちまち観光資源の優良コンテンツとなるため、各国は自国の世界遺産を増やすため注力している。しかしながら、戦争記念を含む、悲劇の痕跡を遺産とし、保存・継承するプロセスにおいては、加害や被害の問題、そして、ナショナリズムの拮抗が生じ、国際問題になるリスクもある。負の歴史遺構を世界遺産として登録することは、消滅の危機に面した記憶を保存することにおいてはプラスになるが、登録することによって歴史認識問題に光を当てることにもなりかねない。殊に、日本の負の世界遺産は、登録こそなされたものの、わだかまりがなくなつたわけではない。世界には、こうした問題を回避しながら、観光と結びつける事例はないのであろうか。次に「ダークツーリズム」の方法論を見てみることにする。

## 2－2. ダークツーリズムの方法と課題

人類が直面した戦争や災害などの悲劇と結びついた旅をDark tourism（ダークツーリズム）と名づけ、概念化する動きが1990年代イギリスで登場する。2000年には、J・レノンとM・フォーレーが『ダークツーリズム』<sup>(13)</sup>を著した。その後、ヨーロッパを中心に多様な死や悲劇にまつわる旅を表す「ダークツーリズム」という言葉が一定の学術的認知を得、

<sup>(11)</sup> このプロセスに関しては、木曾功2015年『世界遺産ビジネス』小学館新書 参照。

<sup>(12)</sup> 木曾功 2015『世界遺産ビジネス』小学館新書

<sup>(13)</sup> John Lennon, Malclom Foley "Dark Tourism" Cengage Leaning EMEA 2000

今日に至っている。無論、世界遺産に正も負も区別がなかったように、戦争にまつわる場所やアウシュヴィッツに代表されるようなユダヤ人迫害の歴史的ポイントにわざわざ旅行者が訪ねていくことは現象として珍しくなかったが、こうした本来多様であるはずの「負の痕跡を旅すること」の方法論を思考する機会が開かれ、改めて負の遺産を巡るツーリズムの可能性が学術的にも社会的にも検討されている。こうした試みは、戦争などの死の記憶が年月とともに風化される中にあって、もう一度人々を惹き付ける一つの方法論としても有用であるかもしれない。

ホロコーストの悲劇を記念するアウシュヴィッツ＝ビルケナウ博物館は、年間150万人が足を運ぶ。しかし、世界から訪問者を迎えるようになるには、戦後の長い時間が必要であった。ホロコーストや戦争における死者は、そこであった死がどんなに不条理で無慈悲であっても、自ら語ることはできない宿命にある。幸運にも悲劇の死を免れた人々は、その死を想像することしかできない。実際には目に見えないショッキングな大量死をいかに可視化できるのか、我々は惨禍の後に多様な方法を模索するしかない。アネット・ヴィーヴィオルカが「アウシュヴィッツ＝ビルケナウは二つの歴史の場である」<sup>(14)</sup>とするように、アウシュヴィッツ＝ビルケナウは、大量虐殺の場となった歴史と戦後に博物館となった歴史の二つを有している。第二次大戦後、ポーランドは、収容所を徐々に慰靈と記念の場として整備していった。今でも訪れた者が必ずショックを受けるだろう大量の髪の毛やカバン、靴などを展示したのも、こうした経緯でなされたものである。しかしながら、大量死を想起させるだろうモノの所有者たちが、虐殺されたユダヤ人のものであると記述されるようになったのは1990年代になってからだ。アウシュヴィッツ＝ビルケナウ収容所の第二の歴史は、まず、「ポーランド人民と諸国の人々の戦いと殉教のモニュメント」というポーランド人の記憶の場として立ち上がり（1947年）、その後、収容所から脱走者がでたことで無作為

---

<sup>(14)</sup> アネット・ヴィーヴィオルカ「アウシュヴィッツをおとずれること」竹沢尚一郎編（2015）『ミュージアムと負の記憶』東信堂

に死刑を宣告された労働者に妻子がいると知って、自ら餓死刑にのぞんだポーランド人のコルベ神父<sup>(15)</sup>の独房が聖域化され、カトリックとポーランドの象徴的な場として再構成される。東西冷戦期は、「国際反ファシスト」の観念も注入されたが、しかし、「カトリックと共産主義者の記憶は、ヨーロッパ中のユダヤ人の最終解決の場としてのビルケナウを隠蔽していた」<sup>(16)</sup>のであり、そこがユダヤ人大量死の記念の場となるのは、1979年にユネスコによって世界遺産登録され、人類史の記憶の場として認識されたのち、1980年代の終わりになってからだという。アウシュヴィッツ＝ビルケナウは、ポーランドナショナリズムの物語、カトリックの物語、反ファシストの物語、ユダヤの物語、そして、人類史の物語と幾重にも層をなして、今に至る。アウシュヴィッツ＝ビルケナウが多くの人々を迎えるようになったのには、その悲しみの記憶を多方面から見つめなおし、普遍的な方法論に近づけていったからではなかろうか。

ストーンが「ダークツーリズム」をそのダークネスの濃さになぞらえて、整理しようとする<sup>(17)</sup>のは、引き起こされたダークネスが多様であるだけでなく、その場所がダークネスをどう表象するか、そして、その場を訪れる人がその表象をどう受け取るかを含め、非常にバラエティがあるからだ。死や悲しみなどの悲劇をツーリズムと結びつけ、「ダークツーリズム」の枠組みで考えることは、記念の場の可能性を広げるが、他方、そのダークネスが「政治的影響やイデオロギーが強いのか、弱いのか」、「死や苦しみの場所なのか、関連する場所なのか」、「教育的なのか、エンターテイメントなのか」、「歴史中心で、保存や集団的記憶であるのか、継承中心で、商業的やロマン主義であるのか」、「真正であると

<sup>(15)</sup> コルベ神父は、1930年、被爆後の長崎の復興に貢献したゼノ修道士とともに長崎に訪れていたということで、日本でも知られている。

<sup>(16)</sup> アネット・ヴィーヴィルカ ibid. p. 72

<sup>(17)</sup> Stone P. 2006 "A dark tourism spectrum: Toward a typology of death and macabre related tourist sites, attraction and exhibitions" *Tourism: An Interdisciplinary International Journal*, 54(2): 145-160

いう解釈なのか、そうでないのか」、「場所の真正性があるのか、ないのか」、「出来事から経た時間が短いのか、長いのか」、「意図されない供給なのか、意図された供給なのか」、「観光インフラが整っていないのか、整っているのか」というように様々な指標によって区分できる。「ダークツーリズム」の概念はまだもろく流動的である<sup>(18)</sup>ため、今後細かく検証していく必要があるだろう。しかし、アウシュヴィッツ＝ビルケナウ収容所が時間的経過やその時代ごとの解釈の重なりによって、単にユダヤ人の被害者家族やポーランド人だけのものでなく、多くの人々にひびく場となったように、負の場所が普遍的解釈によって、人類の啓発的な場所へと変貌をとげることが「ダークツーリズム」を成功に結びつける1つのトリガーではなかろうか。

ホロコーストの記憶を風化させないための場所は、アウシュヴィッツ＝ビルケナウだけではない。ドイツの都市ベルリンには、ホロコーストの悲劇を想起させる空間がいくつも存在し、ツーリストを惹きつけている。そこでは、建築家やアーティストたちが記憶の媒体となって、現代の旅行客にもホロコーストが何だったのかをうたうとしている。2001年にできた「ベルリン・ユダヤ博物館」もその一つである。世界的有名なホロコースト生存者の子孫である建築家、ダニエル・リベスキンドによる建築は、町の景観の中で一際モダンで異彩を放っている。建物の中に入ると、傾いた地面と迫りくる壁で、訪れる人を不安な気持ちにさせるような構造で、ルートが三つに分かれている。一つ目が「亡命の軸」、二つ目が「ホロコーストの軸」、そして、三つ目が「継続の軸」である。これは、第二次世界大戦におけるユダヤ人がたどった運命の軸を表しているというわけだ。そのうちの一つ「ホロコーストの軸」をたどると、強制収容所の名前が壁に並び、ユダヤ人たちの遺留品が展示されている。さらに進むと高い天井に僅かな光しか見えない真っ暗な部屋「ホロコ

---

<sup>(18)</sup> Stone P. 2006 "A dark tourism spectrum: Toward a typology of death and macabre related tourist sites, attraction and exhibitions" *Tourism: An Interdisciplinary International Journal*, 54(2): 145–160

スト・タワー」に突き当たる。また、「記憶のヴォイド」と呼ばれる場所には、イスラエル人彫刻家メナシェ・カディシュマンによるアート・インスタレーションがある。展示物だけでなく、建物自体やアート作品がホロコーストで亡くなった死を想起し、ユダヤ人の歴史を考えさせるようになっている。

2005年には、ブランデンブルク門の南に、ピーター・アイゼンマンによる「虐殺されたヨーロッパのユダヤ人のための記念碑」が建築された。1万9073m<sup>2</sup>の広い土地にコンクリート製の石碑が2711基グリッド状に並んでいる。その石碑は、入り口付近にあるものは低く、中心部に進むに従って徐々に高くなっており、地面はところどころ歪んでいる。石碑に囲まれると方向感覚を失い、ただ空だけが隙間からのぞむ。この高さの違う石碑がいったい何を表しているのか、明示してあるわけではない。訪れる人は、ただ、モダンな建築物の中で、虐殺されたユダヤ人を考える機会を与えられている。2000年以降に生まれたこのような記念の場は、歴史に興味関心のある人だけでなく、建築やアートに魅了された人々をも惹きつけ、結果的にホロコーストの記憶の継承に一役買っていると言える。こうした都市ベルリンにおける「ダークツーリズム」の形は、日本でも実践可能なのであろうか。

### 3. 日本における戦争記念の可能性と課題

#### 3-1. 普遍的戦争記念：広島の可能性

井上明は、ヨーロッパと日本のダークネスの受け取り方の違いを以下のように述べている。「天国と地獄」「天使と悪魔」「生と死」といった二元論的構造を用いてきたヨーロッパは、「記憶なり歴史は、光の影の両面を当然にもつという原理的な思考形態の下で文化が発展してき」ており、「ダークツーリズム」を違和感なく受け入れることができたが、日本の場合は、こうした文明の構造をもっておらず、「悲劇を構造的に分析し、教訓化する力が非常に弱く、単に慰靈碑を建てて、それで済ませてしまっているケース」も多く、「『影の記憶』を受け継ぐための文明

的な仕組みが欠けているから、「ダークツーリズム」がいまひとつ盛んにならないのではないかと指摘する<sup>(19)</sup>。必ずしも、日本の文化がそうした構造を持ち得ないとは言い切れないものの、「ダークツーリズム」がポストモダンから多くの刺激を受けているものとみなせば、日本の戦争記念の多くは、モダンなままでツーリズムに結びつくまでには変革が必要かもしれない。

広島の原爆慰靈碑、原爆資料館、原爆ドームを含む広島平和記念公園を中心とした原爆の記憶の場は、世界遺産登録を経て、オバマ大統領を迎えて、今日世界から人々が訪れる場所になってきた。それは、被爆後の荒れ果てた地から何度も多方向からの再構成の末に、普遍的な価値観を見出す記念の場となったからに他ならない。オバマ大統領の演説からも、広島という戦争記念がどのようなものとして受け取られているかがうかがい知れる。

なぜわれわれはこの地、広島にやって来るのであるのか。そう遠くない過去に放たれた恐ろしい力について思案するために来るのである。

だから私たちはこの場所に来る。私たちはここ、この街の真ん中に立ち、原爆投下の瞬間を想像せずにはいられない。

謝罪を回避することが外交マターであったにせよ、オバマ大統領にとって、広島は、原爆投下を想起し、そして、その驚異的破壊力を思索するための場であった。碑文の「過ち」が人類のそれであるというものと呼応するように、以下のようにも言っている。

われわれは皆一つの人類という家族の一員であるとの根源的で必然的な考え方だ。これこそ、われわれ皆が伝えなければならない物語だ。

---

<sup>(19)</sup> 井上明 2018『ダークツーリズム拡張—近代の再構築』美術出版社 p.18

そして、この演説の中で、広島は、第二次大戦全体の死者、ホロコーストの死者ともつなげられるのだ<sup>(20)</sup>。広島の惨禍の記憶は、人類史の中で再構成される。人類の過ちとして、国家という枠組みを超える。普遍的な戦争記念という位置づけのなかで、原爆投下を指揮した国家、アメリカの代表を迎えることができ、双方を納得させることができる。こうした意味において、広島は日本のドメスティックな慰靈の場でなく、世界に開かれた場所となり、日本の中では珍しい「ダークツーリズム」の可能性を広げる場所と言えなくもない。

### 3-2. 日本における戦争記念の課題

他方、日本における戦争記念は、依然として、ドメスティックな物語で閉じられ、ナショナルな歴史認識の争いから抜けきれないことも確かにである。このことは、日本における戦争記念をツーリズムから遠ざける原因にもなっている。先にも引用したオバマ大統領のスピーチは、よく練り上げられており、わざわざ被爆者を「10万人以上の日本人の男性、女性、子どもたち、数千人の朝鮮人、十数人の米国人捕虜を含む死者」と言った。朝鮮人犠牲者とともに忘れずにスピーチに加えたのだ。なぜなら、広島平和記念公園一体の記憶の場において、「朝鮮人原爆犠牲者慰靈碑」の問題は度々、この悲劇をナショナリズムの対抗の場に変えてしまっていたことを熟知していたからであろう。

「韓国人原爆犠牲者慰靈碑」は、1970年、法律上公園内に新たに碑を作るのが難しかったことと、そこが朝鮮王族の一族、李鍛（1912-45）が被爆し、最後に発見された場所であったことから、在日日本韓国居留民団有志が公園の外の本川端西詰めに被爆した朝鮮人を悼む慰靈碑を建立した。しかしながら、後に、碑が公園の外にあるのは差別的ではない立した。

<sup>(20)</sup> 「数年の間に、およそ6000万人が亡くなった。われわれと何ら違のない男性、女性、子どもたちが、撃たれ、たたかれ、行進させられ、爆撃され、収容され、飢えさせられ、ガスで殺された。世界中に、この戦争を記録する多くの場所がある。勇気と英雄の物語を示す記で殺された。世界中に、この戦争を記録する多くの場所がある。勇気と英雄の物語を示す記碑、言葉では言い表せない悪行がこだまする墓地や空になった収容所がある。」とスピーチの中でも述べている。

のかとの論争がおこり、国際問題に発展した。その他に、冷戦構造の問題も入り込み、在日日本韓国居留民団と朝鮮総連の意向をどう碑に反映するかという問題も抱えた。一次は、冷戦構造を慰靈に持ち込まないとの考え方から、在日日本韓国居留民団と朝鮮総連の統一碑の構想もあがつたが、韓国、北朝鮮、日本側の合意が得られず、この構想は実現しなかった<sup>(21)</sup>。結局、1999年移設することで一つの決着となった。アウシュヴィッツ＝ビルケナウ収容所が時代の要請により、誰をどのように記念するかが変わっていったように、広島も「韓国人原爆犠牲者慰靈碑」問題を通して、被害者の多層性に気づき、その形を変えていった。ただ、この普遍的な場所への変革は、まだ道半ばであり、問題は残っている。

オバマ大統領の広島訪問を控えた5月27日午前、韓国人の被爆者5人と被爆2世1人らが、広島平和記念公園を訪れ、「韓国人原爆犠牲者慰靈碑」に献花し、メディアの取材に対して、沈鎮泰（シム・ジンテ）さん（73）は「オバマ大統領には、韓国人原爆犠牲者慰靈碑にも足を運んでもらいたい。そして、核兵器を使った国として謝罪し、責任を取って被爆者に賠償するべきだ」と述べた。後の取材では、「オバマ大統領が韓国人原爆犠牲者の問題について初めて言及してくれました。それは初めてのことですし、ありがとうございます。」とオバマ大統領がスピーチの中で言及したことについて一定の理解を示した上で、しかし、献花式典に韓国人犠牲者の関係者が招かれなかったことを悔やんだ。現在、広島平和記念資料館のHPにも、「韓国人原爆犠牲者慰靈碑」移設の経緯や徴用工のことは明記してあるが、被害者にとって、オバマ大統領のパフォーマンスや広島の記念のあり方は納得のできるものではなかったのだろう。広島の記念の場は、戦後70年を経て、少しずつ変化し、人類史的な観点から普遍的価値が見出されてきたものの、依然としてナショナルな引力が拮抗し、当事国国民にとっては、居心地の悪さが残る場なのかもしれない。このあたりがアジアからの訪問者が少ないことと繋がつ

---

<sup>(21)</sup> 濱田武士 2015 「平和の聖地と悲惨のありか」 竹沢尚一郎編『ミュージアムと負の記憶』 東信堂 p. 112-145.

ているとも考えられる。

戦争記念は誰のためのものか、という問題に立ち返れば、犠牲者が多層で複雑であれば、その多様性を汲み取っていかない限り、多くの犠牲者、関係者を満足させられるようなものにはならない。まして、「ダークツーリズム」といったように、第三者がその死を想起し、わざわざ訪れるような場所になるには、人類史的な視点や普遍的価値観がなければ難しいであろうと思われる。

### 結論

戦争を記念する場所の中には、そもそもツーリストに開かれることを望まない場所や観光に不向きな場所があることは確かだ。しかし、戦争記念とツーリズムを相反するものと決め付けるのではなく、共存させることで、戦争の記憶がより多くの人々の心に継承され、引き継がれていく可能性も広がる。「ダークツーリズム」の方法論とは、そうした可能性を示している。戦争経験者がいなくなる中で、その記憶をどう生きる人々に伝えるかは喫緊の課題である。

アウシュヴィッツ＝ビルケナウや広島は、その悲しみや苦しみの記憶を長い月日の中で多角的に呼び起こし、表象することで、ナショナルな物語に閉じこもることなく、普遍的な語りを得て、海外からの訪問者を迎えるようになったといえる。アウシュヴィッツ＝ビルケナウの「死の門」を目の前にしたとき、私は、ドイツ人でもユダヤ人でもなかつたが、こうした狂気をもつ人間と恐怖にさらされた人間の両者の記憶を想像した。また、都市ベルリンの中にある博物館の中で、第二次世界大戦に巻き込まれたユダヤ人の選択を想像した。ツーリストである私を迎えた記憶の場所は、こうして継承されるかもしれない。ある年の8月6日、暑さの酷い広島で声をかけてくれたのは外国人旅行者だった。なぜ彼らが原爆投下の日を選んでそこに来たのかはしらないが、彼らはきっと原爆被害の記憶をそこで想起したに違いない。私は広島平和記念公園に行くたびに「韓国人原爆犠牲者慰靈碑」にも足を運ぶ。多層的な記憶が広島に存在することを実感できるからだ。

仮に、日本の戦争記念がツーリズムと共に存し、戦争の記憶の継承に期待するのであれば、多様な人々がその記憶を想起できるような変革が必要であることは間違いない。相対する歴史史観をもつ近隣諸国からの人々は、日本の戦争記念をどのように受け取るのかということも考えなくてはならない。多くの東アジアの戦争記念は、いまだナショナルな表象空間が多く、そのナショナルな物語に同調できないものを拒んで、ツーリストには不向きなものも多い。しかし、戦争を知らない次世代が客観的に戦争の記憶を想像し、その悲劇に想いをはせ、また同じことを繰り返さないように考えることを目的として考えるならば、ツーリストにも受け入れられる普遍的な記念の形が必要になるであろう。ツーリストが戦争記念の場所を訪れ、戦争の記憶を想起することは、戦争を風化させない一つの方法と考えられないだろうか。戦争記念とツーリズムの遭遇を私は一つのチャンスだと考えている。

### 【参考文献】

- 井出明 2013 「ダークツーリズム入門 #1 ダークツーリズムとは何か」  
『ゲンロンエトセトラ』 7 : 46-53
- 井出明 2018 『ダークツーリズム 悲しみの記憶を巡る旅』 幻冬舎新書
- 井出明 2018 『ダークツーリズム拡張—近代の再構築』 美術出版社
- 岡本伸之（編） 2001 『觀光学入門』 有斐閣アルマ
- 遠藤英樹 2018 『觀光社会学2.0 拡がりゆくツーリズム研究』 福村出版
- 木曾功 2015 『世界遺産ビジネス』 小学館新書
- 竹沢尚一郎編 2015 『ミュージアムと負の記憶』 東信堂
- デービット・アトキンソン 2015 『新・觀光立国論』 東洋経済新報社
- 西村幸夫・本中眞（編） 2017 『世界文化遺産の思想』 東京大学出版会
- Foley M. and Lennon J. 1996 'Editorial: Heart of Darkness', "International Journal of Heritage Studies" 2(4): 195-197.
- Foley M. and Lennon J. 1996 'JFK and Dark Tourism: Heart of Darkness'.  
Journal of International Heritage Studies, 2(4), 198-211
- 福間良明 2015 『「戦跡」の戦後史 せめぎあう遺構とモニュメント』 岩波現

代全書

- 吉市憲寿 2012 「『ダークツーリズム』のすすめ」『新潮45』31(12) : 102-105  
Young J. 1993 *The Texture of Memory. Holocaust Memorials and Meaning.*  
New Haven and London, Yale University Press.  
Lennon J.J. and Foley M 2000 *Dark Tourism: the Attraction of Death and Disaster*, London: Cassel